

御茶ノ水子ども医療総合ネットワークからの報告

（注（ ）内は実際の年報には記載されません。）

（病院名：）川口市立医療センター

（科名：）新生児集中治療科

（執筆者の役職：）部長

（執筆者の氏名：）箕面崎 至宏



（冒頭のメッセージ）

早産児、病的新生児の明日のために

（学会の認定施設）

日本周産期・新生児医学会 新生児研修基幹施設

1. 病院概要

川口市は埼玉県南東部に位置し、赤羽から新荒川大橋を渡ると、そこはもう川口です。川口市立医療センターは、川口市のほぼ中心で、首都高川口ジャンクション間近に位置し、周囲はグリーンセンターなど、緑あふれる土地に立地しています。埼玉県南部地域の基幹病院として、診療科数 17 科 539 床を有し、地域の基幹病院としてプライマリ・ケアから三次救命救急、高度専門医療まで広範な医療を展開しています。新生児集中治療科は、埼玉県南東部をカバーする地域周産期母子医療センター（産科 30 床、NICU30 床：NICU 加算 9 床+GCU21 床）の NICU 部門として診療をおこなっています。

2. 科の特徴

入院

当院産科は、2017 年 4 月から慈恵医大、日大からの派遣があり、常勤 6 名体制に戻っています。周産期専門医の研修を開始している産科医も赴任しました。週 1 回産科新生児科カンファランスを持っています。また、2017 年 1 月から埼玉県立小児医療センターとさいたま赤十字病院が、さいたま新都心へ移転し、新たに総合周産期センターとして稼働しています。今後、近隣の周産期センターの役割分担、棲み分けが必要となるでしょう。しかし、当周産期センター担当の埼玉県南東部地域では、戸田中央産院、永井マザーズホスピタルといった年間 1000 分娩以上規模の産科施設や、様々な公的病院の産科を受け持っており、在胎 22・23 週からの切迫早産、前期破水などの母体搬送受け入れ、妊娠高血圧症候群、甲状腺機能異常などの合併症妊娠、多胎（双胎、品胎）妊娠などの外来紹介は、引きもきらず依頼

があります。平成 28 年は分娩数 557、多胎 38（品胎 0）、緊急母体搬送 60 でした。また、在胎 35 週以上で出生体重 2000～2500 g の late preterm の低出生体重児であっても、呼吸循環血糖などが落ち着いていれば、当科管理の下、産科病棟で母児同室を行っています。平成 27 年度のその数は 67 名でした。また、重症児の出産が予想される場合、新生児科医が両親に対し prenatal visit を行っています。

新生児集中治療科（NICU・GCU 病棟）への入院は 249 名、極低出生体重児は 48 名（超低出生体重児 16 名）でした。挿管人工呼吸管理 67 名、全身麻酔手術症例は 16 例（新生児症例 7 名）、眼科光凝固術 3 例、死亡退院 6 名（剖検 3 例）でした。

小児科循環器、内分泌なども併診に来棟あり、眼科眼底検査回診や整形外科医・理学療法士の回診もあります。



外来

当科を退院した児のフォローアップ外来を月・水・金の午後行っています。極低出生体重児の学齢期までのフォロー、在宅医療児の支援、母乳育児支援などを行っています。気管切開、在宅酸素、在宅人工換気などの在宅医療を必要とする患者の増加もあり、小児科と密接な連携のもと、診療を行っています。また、発達評価や心理面でのフォローを臨床心理士 3 名にお願いしています。

3. スタッフ

スタッフは常勤医 6 名（うち当直オンコール免除 3 名）、特別研修医（後期研修医）3 名で、加えて非常勤 1 名（週 4 日勤務）、2 名（週 1 日）です。防衛医大や埼玉民医連、地域医療振興協会などから、不定期に短期長期の研修派遣があります。非常勤臨床心理士 3 名です。

4. 教育・研修の特色

当科は日本周産期・新生児医学会の新生児研修基幹施設に認定されており、周産期（新生児）専門医となるべく 4 名の医師が研修中です。また当科出身の周産期（新生児）専門医も、4 名（奥、箕面崎、滝、石黒）となり、各施設で活躍中です。

当科では、小児科医として必要な正常新生児の管理から最重症児の呼吸循環栄養管理まで、幅広く研修することができます。また、小児外科、脳神経外科、形成外科などとの連携において、新生児外科疾患の術前術後管理を研修することも可能です。循環器外科疾患に関

しては、小児循環器医の指導の下、診断、急性期の治療を開始し、stabilize 後に循環器専門施設（榊原記念病院、県立小児医療センターなど）へ搬送しています。

INTACT（周産期医療の質と安全の向上のための研究）に参加しており、治療方法などの見直し・検討・改善を行っています。

また、東京医科歯科大、防衛医大、筑波大などの医学生実習、その他埼玉県立大学、川口市立看護専門学校などの看護助産学生実習などの研修指導教育に協力しています。

5. メッセージ

” ユウちゃんは、大きくなったら何になるの？” 私は重症心身障害児で気切チューブの交換に来た兄と来院した妹に尋ねた。小学校2年生になる彼女も31週の低出生体重児である。” ユウねえ。支援学校の先生になって、ケンちゃんみたいな子達を教えるの。” 彼女は、寝たきりの兄や母親の苦労を一番近くで見ているはずで、私はその言葉を聞いて絶句した。

現在の日本、とりわけ埼玉県は、小児在宅医療に対する社会資源が非常にpoorである。人工換気可能な重心施設は数えるほどしか無く、そこも常に満杯である。レスパイトをしてくれる病院も増えてきてはいるが、気軽に利用できる程ではない。非医療畑の行政関係者や成人しか診ない医療者などの中には、「新生児医療は障害児を作り出して社会のお荷物じゃないのか？」と言う認識がまだまだあるようである。確かに今までなら亡くなっていたであろう児が、後遺症を残しながらも救命されるようになった。しかし、その一方で、寝たきりになると思われた児が、ニコニコ歩いてフォローアップ外来に来られる様になったのも、また事実なのである。Intact survival（後障害無き生存）を目指して今夜もNICUは働いている。

6. 業績など

忙しい業務と並行しながら、論文掲載は、埼玉医学会雑誌 2 編、医学雑誌総説解説 2 編。学会発表は、全国学会 6 題、埼玉地方会埼玉医学会など 6 題発表しました。

2016 年度スタッフ紹介 ○小児科専門医 ＊医局外

氏 名	身分	卒業年	専門領域	学会役職など
○箕面崎 至宏	部長	平成元年	新生児	小児科専門医、周産期専門医・指導医、小児科学会埼玉地方会理事、日本新生児成育医学会評議員、日本 SIDS・乳幼児突然死予防学会評議員、NCPR インストラクター
○佐藤 千穂＊	医長	平成 17 年	新生児	小児科専門医、PALS、NCPR プロバイダー
○伊藤 一之		平成 21 年	新生児	小児科専門医、PALS プロバイダー、NCPR インストラクター
○勝碕 静香		平成 21 年	新生児	小児科専門医、NCPR プロバイダー
○早田 茉莉		平成 22 年	新生児	小児科専門医、IBCLC、PALS プロバイダー、NCPR インストラクター
四手井 綱則		平成 23 年	新生児	PALS、NCPR プロバイダー
田村 友美恵		平成 25 年	一般小児	PALS、NCPR プロバイダー
友田 昂宏		平成 25 年	一般小児	PALS、NCPR プロバイダー
山内 泰輔		平成 26 年	一般小児	PALS、NCPR プロバイダー

卒後 3 年目以上の医師のみ掲載

^